MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．４．１５　発行元
第 467 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中山七里の代表作

中山七里は毎年注目作を連発しているので、今後も「代表作」と呼べるものは生まれてくるだろう。今回は初期の頃の作品を取り上げてみる。「これはすごいぞ！」と衝撃を受けるものが多かったなぁと思う。

「このミステリーがすごい！」大賞から

中山七里は『このミステリーがすごい！』大賞からスタートした作家。私は受賞の２～３年後に読み始めた記憶がある。今回取り上げた代表作の三作、私の読んだ順で言うと『さよならドビュッシー』、『贖罪の奏鳴曲』、『連続殺人鬼カエル男』の並びになる。

中山作品で言うと、『岬シリーズ』と『御子柴シリーズ』が双璧で、その後書かれたシリーズはやや見劣りする。『岬シリーズ』は音楽の力、『御子柴シリーズ』は法廷ものとして抜群の面白さに仕上がっている。まるで作者がその道のプロ、専門家なのではなかろうかと思わせるほど高いレベルの内容である。知識量も感性も素晴らしい。

さまざまな作風をこなせるのも強みで、「どんでん返し」の名手と名付けられているものの、幅広いテーマ設定とそれに合わせた山あり谷ありのストーリー展開が一番の特徴である。まともな「本格もの」でもないし、まともな「警察小説」でもない。それでも最後は読者をあっと言わせるパターン。

現在著作は６０冊を越えている。今のペースでいくと１００冊に達するのはあと数年後。

NO.3「連続殺人鬼カエル男」

２０１１年宝島社文庫。『災厄の季節』の題名で『さよならドビュッシー』と同じ年に『このミス』大賞に応募した作品で、共に最終候補に残ったといういわくつきの本。『さよならドビュッシー』とは全く作風が異なる。冒頭からマンションの階段に全裸の女性の死体が吊り下げられる場面になる。猟奇殺人事件で、サイコスリラーの流れに一気に突入する。死体にかかっていたシートには「きょう、かえるをつまえたよ。…」で始まる文言を書き記した紙片が貼られていた。続いて第二、第三の殺人が…。警察は手掛かりを掴むことが出来ずに混乱に。「どんでん返し」の中山の本領が発揮されていて、結末に用意されているものは読者の意表を突く形で…。

NO.1『さよならドビュッシー』

２０１０年宝島社。『このミステリーがすごい！』大賞受賞作。応募時の題名は『バイバイ、ドビュッシー』。『岬洋介シリーズ』の第一作になるが、当時はこれがこれほどのシリーズになるとは予想も付かなかったし、岬洋介の印象もそれほど強いものではなかった。ひたすらピアノに向き合う少女のイメージだけが巨大な残像として残る作品だった。

最初の頁に登場してくるのは香月遥とその従姉妹の片桐ルシア。ルシアはスマトラ沖津波で両親を失い、香月家の引き取られた形になっていた。二人はピアノに打ち込み、間もなく高校音楽科に入学することになっている。厳しい指導をする鬼塚先生。そこへかつての教え子・岬洋介が訪ねてくる場面になる。その後、香月家を不幸が襲う。両親が不在の時に、当主香月玄太郎の部屋から出火して遥とルシアは巻き込まれてしまう。一人だけ生き残ったものの、声はかすれてしか出ず、指も思うように動かなくなってしまった。顔は整形によってすっかり元に復したが、ピアノは諦めるしかないのか…。更に追い打ちがかかるように事件が発生して、混乱に陥る。急遽、岬洋介が指導を買って出てコンクールに出場するところまでこぎつける…。

No.2「「贖罪の奏鳴曲」

２０１１年講談社。『御子柴礼司シリーズ』の一冊目になる。とは言いながら、冒頭に出てくるのは本編の主人公である弁護士・御子柴が死体を運搬し遺棄する場面で、スタートから読者は翻弄されることになる。作者がどんな物語を展開させようとしているのかが見えず、不安が一気に盛り上がってくる。どの場面を取っても思いがけない方向に進み始める？？の連続。

御子柴について言えば、冒頭の場面に続いて多額のお金を持っている依頼者から億単位の謝礼を引き出す描写になる。悪辣な弁護士ぶりが刷り込まれる。入間川堤防で発見された男性死体。やがてフリーの記者で強請常習者の加賀谷竜次と身許が判明するのだが、その容疑者として御子柴が浮かぶ。埼玉県警の古手川と渡瀬は御子柴の捜査を開始する。でも死亡推定時刻に御子柴は東京地裁の裁判に立ち会っていた。アリバイは完璧。御子柴が現在取り組んでいるは夫殺しの容疑を掛けられた東條美津子の弁護。入院中の夫の人工呼吸器を止めた罪である。その流れの中で、御子柴が十四歳の時に幼女殺害事件の犯人になっていることも見えてきて、複雑な要素が絡み合っている状況が明らかに…。法廷場面でのやりとりは圧倒的な勢いで読者に迫ってくる。